

日本科学者会議はこんな学会です

自然科学・社会科学・人文科学を横断して、全国の大学で多くの教員が、日本科学者会議（JSA）に入会して、充実した活動をしています。

「専門を超えた交流ができて、率直に面白い。」「専門の研究教育は、外部資金や評価でどんどん進めるわけだが、それだけでよいのか。JSAは大学で感じる飢えを少し満たしてくれる」「東日本大震災を映像でみてきたが、個人でも大学でもできなかった。JSAにいて、震災・原子力災害の問題を考え、取り組むことができよかった。」…専門学会でない分、JSAの会員になる、会員であることには、少しのこだわりがあります。数名の声を、紹介します。

良心を発揮して、最も必要なことに真摯に向き合える場

三宅 良美



秋田大学教育文化学部教授。言語人類学・社会人類学。対象言語は、インドネシア語、ジャワ語、ヘブライ語など。言語とジェンダー、階級問題に興味をもっています。良い映画と美しい景色・音楽を追いかけてどこにでもいく快樂主義者。

日本の大学を卒業してからはインドネシアへ調査、それからアメリカの大学へ。Ph.D. キャンディダシーをとってからは、イスラエルに移住し、テルアビブ大学で教えていました。どうして、2004年日本に戻ってきたのだろうか。2002年のイスラエルでは、頻繁な自爆攻撃と、その自爆に対するイスラエル軍の報復のサイクルが果てしなく続き、尋常ではない状況でした。「パレスチナに原爆を」などと人が言い始めた頃、私には限界が来ていました。

最初秋田大学のキャンパスに入ってきたとき、金属探知機を手にもつセキュリティー要員がどこにもいないことに違和感を覚えました。「ここはなんと平和なところだろう。」と思いましたが、一方、この平和のありがたさを感じないどころか、あえてつまらぬ利己的な政治が横行し、大学は、安セールスをしていてとめどがない日本にいて、憂鬱になってしまうのです。アメリカでもイスラエルでも、大学は自国の軍事的行動にNOと言う教員と学生がいて、特定の攻撃をしたときには、反対集会をして声明文を出します。しかし、日本の大学では知らんぷり。

JSAに入会したのは偶然のようなものでしたが、それぞれの分野の専門家が良心を発揮して、今の人類のもっとも必要としていることに真摯に向き合える場を提供してくれるのが、このJSAだと思っています。2011年3月11日の震災のときには、偶然国外にいて、国際メディアがメルトダウンが起きた模様だと報道していました。日本での報道と食い違う中、メンバーの方々にメルトタウンとは何かを丁寧な教えてもらうことができました。JSAは私にとってセラピーであり、日本における研究者・教育者たちの良心の砦だと思います。

あなたの入会を心から歓迎します！

日本科学者会議 The Japan Scientists' Association

〒113-0034 東京都文京区湯島 1-9-15 茶州ビル 9階 mail@jsa.gr.jp

Tel.03-3812-1472 Fax.03-3813-2363 http://www.jsa.gr.jp/

日本学術会議協力学術研究団体 / 文部科学省 登録学会番号 30057

日頃触れることのない多様な世界 に触れ、その深みを知る

前田 耕治

京都工芸繊維大学物質工学部門教授。理学博士。専門は分析化学、電気化学。特に興味のあるテーマは振動反応、界面反応を電気化学で解くこと。野球、溪流釣り、映画鑑賞、サスペンス小説が趣味。



はじめまして、JSA 会員歴 29 年の大学教員です。院生時代の京大宇治分会からスタートして、兵庫支部、福井支部と渡り歩き、京都支部に戻って 16 年が経ちました。

この数年は、『日本の科学者』の編集委員や大会代議員を務めて、JSA の奥深さを知り得ましたが、細々と一会員として過ごしていたときでも、化学の狭い領域に留まることなく、研究者として広い視野と社会進歩の視点を持ち続けられたのは、常に JSA が近くいてくれたお蔭です。

OD までを過ごした宇治分会では、教職員・院生が世代を超えて参加した例会や旅行を通じて、科学者の社会的責任や研究者としての将来を語り合い励まされました。兵庫支部時代は、ソ連崩壊による動揺が研究者内にもあることに驚き、社会主義の未来を考えさせられました。福井支部時代には、1995 年の地下鉄サリン事件の社会的背景とも絡んで、安斎育郎氏（現 JSA 代表幹事）の「科学的なものの見方」に関する演出を交えた講演が印象的でした。さらに、同年 12 月のもんじゅ事故と動燃のビデオ隠し事件を、現地の怒りとともに間近に経験し、システムと誤謬の議論を深めました。

JSA は、日頃触れることのない多様な世界に触れ、その世界の深みを知ることでできる、他に類のない学会です。多くの方が入会され、JSA がさらなる発展をするよう期待します。

研究者としての基本を教わり、 成長する機会にも

鳥畑 与一

静岡大学人文社会科学部、金融論。金融機関への自己資本規制から中小企業金融、消費者金融そしてファンド問題などを幅広くリサーチしながら、略奪的金融の告発とともに金融の「実体経済を育てる力」の復活をどう実現するかを模索中。



自分がそもそも研究者としてやっていけるのかという不安と闘っていた院生時代、そして、どういう研究者として成長していけるのかを暗中模索していた若手時代の支えとなったのが、JSA に加盟している院生仲間であり、大御所から中堅までさっそうと研究者として輝いていた JSA の先生方との交流でした。研究はもちろん知的探究心が源泉ですが、その探求がどこかで社会と交流し、そこで何かしら意味のあるものであったことを感じとれることが、社会科学者としての私の燃料源でした。そういう研究者としての基本を教えてもらったのが JSA だったと思います。

社会科学者に留まらない自然科学者との交流、さらには社会科学領域の中でも様々な学問領域の研究者との交流、そして、何よりも研究者としての社会的責任を重んじる姿勢は、時として私に、狭い専門領域から飛び出して新しい研究課題に挑戦することを、後押ししてくれました。そういう中で、例えば、消費者金融被害者団体から依頼された消費者金融の高金利正当化論への理論的批判や、いま JSA で研究会を立ち上げて取り組んでいる「ハゲタカ・ファンド」による企業破壊問題への取り組みは、しんどいですが研究者としての自分を成長させる機会にもなってきたと感じています。

研究とは定年がない、終生続くマラソンのようなものとするならば、時として草臥れた自分を励まし、オアシスのように再生する力となってくれたというのが、30 年に及ぶ JSA 会員歴を経た実感でもあります。

JSA で、アカデミックサーフィンを！

今岡 良子

大阪大学言語文化研究科准教授（旧大阪外大）・遊牧地域論。1985年、大学院生の頃「日本の科学者」を読んで、会員になる。趣味は、乗馬と和太鼓。



2011年3月、福島原発事故。何かをしなければ、と福島大学の学生と交流を始めた頃、学生や院生とともに「科学者の責任」を討論する場を作り、福大の学生を受け入れてくれたのは、阪大のJSAの先輩たちでした。

同年5月の毎日新聞「モンゴルに核廃棄物処分場 日米極秘計画」というスクープ。モンゴル語をたよりに遊牧社会のフィールドワークをしてきた私には、「核廃棄物」という言葉は想定外(!)の専門用語。JSAの様々なシンポジウムに参加し、勉強させていただきました。

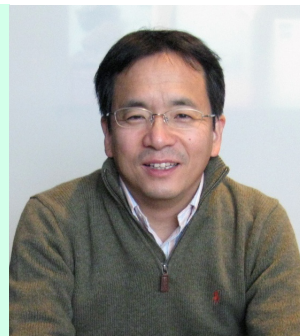
モンゴルの核廃棄物問題にかかわる政治状況がわかってくると、JSA近畿地区の先輩たちが「原水爆禁止世界大会科学者集会」で報告するという大きな機会をくださいました。その予稿集を持って、モンゴルで調査を進めると、百人力でした。調査から帰り、JSAのメンバーの誰かに質問すると、どこどこに支部があり、そこに専門家の誰々がいるから相談してごらん、と教えてくれます。

何か求めると、背中を押してくれるところがJSAです。法人化後、大学は中期目標に縛られて、窮屈になりました。学問の世界は広く、深い。のびのびとアカデミックサーフィンをしたい方には、JSAがおすすめです。

自分を高めてくれた JSA

村上 賢治

岡山大学大学院環境生命科学研究科准教授。博士（農学）。専門は野菜園芸学。日々野菜を育てながら、何か新しく、面白いことを見つけようとしている。大阪出身で阪神タイガースのファン。美味しいものを食べ歩くことが趣味。



10年ほど前にJSAに入会し、数年前に岡山支部の事務局長を務め、現在また事務局長です。全国的にみて、岡山支部は（たぶん）活動が活発な部類だと思います。毎月、講演会と幹事会を開催しています。以前に自分が事務局長の時は、権限？を發揮し、自分の聞きたい内容の講演会を設定したこともありました。幸い、岡山支部は熱心な複数のJSA会員が幹事をされ、仕事は皆で手分けしてやっており、事務局長といってもたいした負担ではありません（サボっているだけかもしれません）。

全国の定期大会にも参加させていただきました。これは楽しかったです。近頃は大学教員が集まれば暗い顔で愚痴をこぼすことが多いですが、全国から集まってきたJSAの人たちは、なぜか明るい顔をしている人が多いです。JSA会員、しかも支部を代表して来た仲間ということで、あたたかく接していただき、他分野の研究者とも楽しく交流できました。2012年の9月に19総学（総合学術研究集会・研究発表の全国大会）を岡山大学で開催しました。実行委員長、総学の事務局長をはじめ、みんな大変忙しかったですが、充実感があり、岡山支部の結束もまた強くなった気がします。

JSA会員としてのありようは人それぞれだと思います。目的を持って活動している人もいれば、たぶん付き合いで入っている人もおり、主義・思想も人それぞれです。ただ、科学者としての良心と倫理意識を持っていることは、共通しているのではないかと思います。私の研究分野も、社会との関わりがとても重要です。マスコミ報道に流されることなく、本当に正しいことは何か、人類の将来のためになることは何かをいつも考えることを、JSA会員になったことで学んだと思います。

JSAを、未来を切り開く研究の場として選びました。

野中 郁江

明治大学商学部教授、博士（商学）。学部は東京教育大学文学部史学科東洋史専攻、大学院は明治大学大学院商学研究科。専門は会計学・経営分析論。「JSA ファンド規制と労働組合研究会」事務局長。

写真左端が野中氏。若い研究仲間たちと研究イベントの打ち上げにて→



JSA との出会いは、大学院生時代。若手研究者の就職難は学問の継承・発展の問題であることを学びました。しばらくして気がつくとうとう東京支部の個人会員世話人になって、ニュースをだしたり、選挙制度をつくったり、フィールドワークを企画したりしていました。足尾銅山、長瀬自然史博物館、秩父事件調査、東京天文台見学など、素晴らしい先生方や良い仲間恵まれて、本当に楽しかったですし、自然科学を身近に感じられるようになりました。

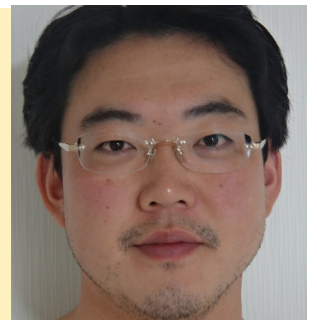
その後、幸運にも専任教員となり、教職員組合の活動に夢中になり、しばらくご無沙汰しておりましたが、この春、「ファンド規制と労働組合」というテーマで、JSA の研究会を新設することになり、久しぶりに JSA に戻ってきた感じです。きっかけは、専門である会計学・経営分析の立場から、ファンドの横暴の犠牲になっている労働組合の相談にのっているうちに、多くの分野の研究者と労働組合関係者との共同研究の場が必要であると気づいたことでした。

なぜ JSA のなかに研究の場をつくったかといいますと、JSA が研究者と運動の担い手との共同を重視していること、若い研究者が視野を広げる場であること、そして JSA が日本社会に果たしてきた役割を信頼することができたこと、があげられます。研究会をたちあげるなかで、多くの会員を迎え入れることができ、ファンド規制というテーマに取り組める体制が整いつつあります。JSA のなかに新しい研究会をつくったことは、「まさに正解！」だったと思います。

仲間を増やして、多数の異なる分野の専門家が集える場を作りたい

安木 新一郎

大阪国際大学ビジネス学部講師。修士（経済学）。専門はロシア経済と貨幣史。現在はおもにロシア極東における経済開発と日本との関係について、特に（貝の）シジミを通して考えている。



2001 年、大阪市立大学の大学院生の時に JSA に入りました。大学院では経営学、歴史学、理学、工学、法学などさまざまな分野の会員と交流することができました。一番の思い出は、2009 年に JSA の合宿「若手夏の学校」で草津に行ったことです。夜の飲み会で理系の院生に FX（外国為替証拠金取引）について説明を求められたときは、自分の理解が十分かどうか自信が持てていなかったこともあり、どきどきしました。

2010 年に大阪国際大学に就職し、この 2 年間に学内で 2 人の会員を増やすことができました。きっかけは、大阪大学の長野八久会員を中心に組織された JSA「複雑系科学ワークショップ」への参加呼びかけでした。勧誘した同僚の一人は経営工学、もう一人は広告デザイン論が専門で、複雑系に興味があるか聞いたところ大いにあったとのことでした。

今後は、現在の本務校で JSA 会員を中心に若手研究者の自主研究会を立ち上げ、院生時代のような多数の異なる分野の専門家が集える場を作りたいと考えています。